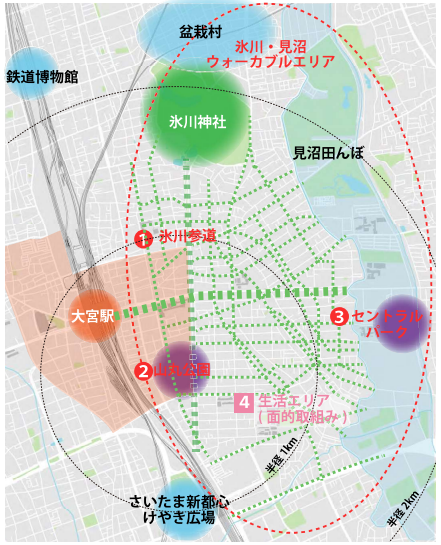
Omiya Walkable City in the GARDEN

ニワノナカニアルマチ

ニワ（ニハ）は古代では何かの行為を行う場所であり、場（プレイス）はニハから派生した言葉。いたる所に何かの行為を行う場所がある大きなニワの中にあるマチを目指します。

大宮のまちは、大宮駅東西に分かれ分断が課題でしたが、「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」と「大宮 GCS プラン 2020」によって、大宮駅を中心として東西が一体となった「東日本の玄関口」として“おもてなし都心ゾーン”を形成していく方針が示されました。また、「大宮駅東口周辺公共施設再編／公共施設跡地活用全体方針」において、東口駅前から氷川参道までの公共施設再編の方針が示されました。さらに、UDCO によるストリートテラスなどの取組みによって、街と人がつながってきています。しかし、この対象範囲は、氷川参道までとなっており、氷川参道がまちのハズレになっています。

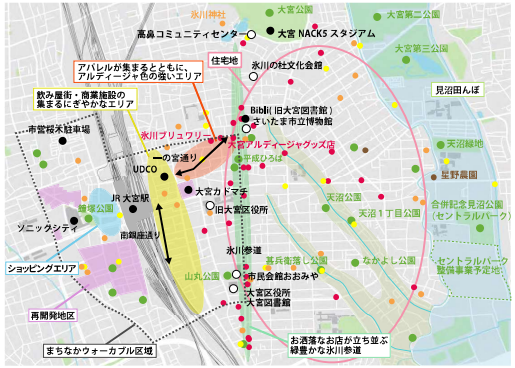


■氷川・見沼ウォーカブルエリアの設定

私たちは、まちなかの計画内容を踏まえ前提としたうえで、「大宮らしさ」をさらに強化し、プロデュースしたい対象を「氷川参道」と「見沼田んぼ」とします。これらに跨るエリアを対象に『氷川・見沼ウォーカブルエリア』の形成を提案します。これにより、ウォーカブルなおもてなしの空間を、東日本の玄関口としてだけでなく、大宮駅周辺の市民の生活のニワとして、大宮らしい自然的資源や農的資源を活かしたエリアに拡大することができ、氷川参道を共有した二つのウォーカブル区域を両輪とした大宮東口地域のまちづくりを構想できます。

また、市民主体で自律的に「歩きたくなる」まちづくりを展開するため、３つの空間的プロジェクトと１つの組織化プロジェクトを提案します。

■資源図



モデルプロジェクト（３+１）　～３つの空間的プロジェクトと１つの組織化プロジェクトの提案～

❶ 氷川参道

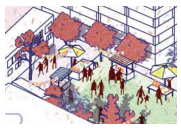
氷川参道の沿道では、リノベーションカフェなどによる賑わいづくりが既に始まっており、今後は、周辺住民も集まる居場所になることや、緑とアクティビティが住宅地にも広がっていき、ウォーカブルなマチの基軸になることが期待されます。

❷ 山丸公園

山丸公園は、大宮区役所・図書館、市民会館おおみや（R4 年 3 月末閉鎖）や氷川参道に隣接しており、大宮駅周辺地域戦略ビジョンにある「氷川参道の緑を広げ回遊性を高める杜のひろば」として位置づけた整備が相応しい公園です。しかし現状では、市民会館の建物によって、氷川参道との一体性は希薄になっています。

●キッチンカーを呼べる空間をつくる

●市民が出店する屋台が並ぶ



●農とまちの連携拠点
●ウォークイベントなどのまちづくり活動の拠点
●氷川参道に面して芝生広場をつくる

●セントラルパークで生産する見沼野菜のマルシェ（仮設可変的な半屋外建築）

❸ セントラルパーク

セントラルパーク（次期整備）は、見沼田んぼ地域の農的文化と生活の再生拠点として、農業の６次化を都市公園で体現することを提案します。このような特色を持ったうえで、氷川・見沼ウォーカブルエリアを時間をかけて楽しむ「滞在性」を生む宿泊機能整備を提案します。

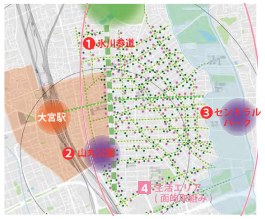
●地産地消やオーガニックなど、本気の農業展開
●まち中のブルワリーと連携した、市民によるホップ栽培

●農的生活の特色を持ったキャンプ・グランピングなど宿泊機能
●焚火・BBQ ができる自然的な広場

●農産物の加工施設
●市民が出店する屋台などでの販売

❶ 生活エリア（面的取組み）

組織化プロジェクトとして、住宅エリアでの自律的まちづくりに向けた面的取組みを提案します（次項詳述）。



●緑とアクティビティが、通りに沿って広がっていく⇒「線」に多くの「点」が加わって「面」になる

「ウォーカブルなまち」を自己組織化させる仕組みの提案

自己組織化とは、「複雑で無秩序な状況の中に、外部からのコントロールを受けずに、自律的に秩序が形成される現象」をいいます。この自己組織化のメカニズムを作用させて、まちの住人や商店主それぞれが「もてなし空間」を提供する主体となり、それらの取組みを連鎖させ、自律的に大宮にウォーカブルなまちをつくり出す仕組みを提案します。

■ 将来像

■ 自己組織化のステップ

初段階では助成制度をきっかけとし、動き始めれば時間とともに取り組みの強度が増し、それが周囲へと影響し取り組みが拡張する、そして自律的に取り組みが面的に広がっていく構想です。

STEP 1　個の主体化

個人個人が外環境を整備し、まちとのつながりを魅力とした暮らしや店が出現する

①個々の住居や店舗において、外環境を活用するための緑化整備を助成により誘導する
②アドバイザーを斡旋し、外へ開いた魅力的な場のデザインをサポートする
③外環境を活かし、暮らしや店の魅力を作ろうとする主体が生まれる

STEP 2　相互触発

外環境を活かす主体同士が連携し、通りの風景を生み出し合う

①同じ通りで個別の整備を連携させた場合の助成インセンティブを設け、連携を誘導する
②助成への応募をきっかけに主体間の交流が生まれ、相互触発が始まる
③個々の取組みがつながりあって、通りに風景が生まれる
④通りの風景が変わり始めることで、興味のなかった主体が影響され外環境整備に関与しだす
⑤通りの風景が個人の意識の変容を促し、ポジティブフィードバックが作用しだす

STEP 3　主体間連携

住民同士が結託し、通りの環境を共有価値として育むコミュニティが醸成する

①「まちなかウォーキングフェス」を立ち上げ、通り単位でのフェスへのエントリーを募る
②フェス期間中、通りのメンバーが結託し、我が通りへの来訪者への「もてなし」を担当する
③いくつもの「通り」がフェスに参加し、通りの居心地と「もてなし」を競い合う
④来訪者からの評価が自慢となり「通りの環境づくり」の進化と深化が進む
⑤「まちなかガーデンショー」が立ち上がり、いくつのも強豪「通り」がグランプリを競い合う
⑥イベントなど誰でも手を挙げて「もてなす側」として参加できるプラットフォームが組織される
⑦まちの行事が恒例化し、時間とともにその規模と範囲が拡張していく

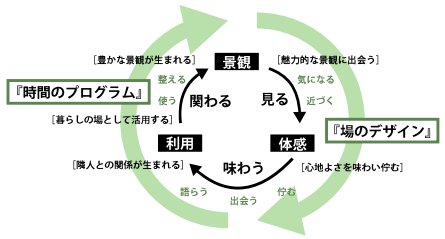
■「場」と「時間」を組み合わせた、自己組織化をもたらす構造

1
「環境」がひとに働きかけ、ひとの行為を引き出す
『場のデザイン』

2
ひとの相互作用の中で行動変容を促す
『時間のプログラム』

この組み合わせによって自律的に人の行為とまちの環境が変容していく構造を確立する。

『場のデザイン』と『時間のプログラム』との連携



こうしたサイクルが回り続けることで、自律的に「歩きたくなる」まちの環境が整備され「もてなす側」と「もてなされる側」との交流が活性化し、魅力的な「ウォーカブルなまち」が育ち続ける